

厚沢部町義務教育学校基本構想

「共に学び、自ら拓く9年間」

～「好き」と「挑戦」を育み、
仲間と共に自らの道を切り拓く子どもたちの育成～

令和8年2月

厚沢部町教育委員会

目 次

第1章 基本構想策定の趣旨	2
基本構想策定の4つの柱	2
第2章 基本構想の位置づけと期間	2
2-1 基本方針との関係	2
2-2 基本計画・実施計画へのつながり	2
第3章 厚沢部町義務教育学校が目指す教育ビジョン	3
3-1 教育理念	3
3-2 育成を目指す資質・能力	4
3-3 目指す子ども像	4
第4章 2030年代の社会を見据えた教育の方向性	5
4-1 「主体的・対話的で深い学び」の深化	5
4-2 探究的な学習の質的向上（異年齢での協同的な学び）	5
4-3 情報活用能力の抜本的向上	6
4-4 グローバル教育とローカル実践の統合	6
4-5 健康・体力の向上と生涯スポーツの基盤づくり	7
第5章 9年間一貫教育の教育課程の構想	7
5-1 学年段階の区切り（2・3・4制の導入）	7
5-2 教科等横断的な学びの推進	8
5-3 個別最適な学びの実現	9
5-4 厚沢部町ならではのカリキュラム	9
5-5 新しい学びに対応した評価のあり方	10
第6章 学習空間と教育環境の基本コンセプト	11
6-1 CO-SHA Platform理念に基づく柔軟で創造的な学習空間	11
6-2 安全・安心で快適な教育環境	13
6-3 地域連携・複合化の視点	13
第7章 地域とともに歩む学校づくりの構想	14
7-1 コミュニティ・スクールの充実	14
7-2 地域資源の活用	14
7-3 学校を核とした地域づくり	14
7-4 開かれた学校運営	15
第8章 今後の検討プロセス	15
8-1 対話型設計プロセスの推進	15
8-2 開校準備	16
8-3 教職員の働き方改革と業務効率化	16
むすびに	17

第1章 基本構想策定の趣旨

厚沢部町義務教育学校基本構想は、令和7年1月に策定された「厚沢部町義務教育学校設置に関する基本方針」を踏まえ、具体的な教育内容と学校づくりの方向性を示すものです。

本基本構想では、**次期学習指導要領（2030年代）¹を見据えた教育の実現**を目指し、文部科学省が推進するCO-SHA Platformの理念を導入して、新しい時代に求められる学校づくりを進めます。²

基本構想策定の4つの柱

- **基本方針を踏まえた具体化**：基本方針で示された理念を教育課程と施設計画に具体化
- **次期学習指導要領（2030年代）を見据えた教育の実現**：「好き」を育み「得意」を伸ばす個別最適な学びの推進
- **文部科学省CO-SHA Platformの理念（多様な学びに対応する学校施設づくりの指針）の導入**：柔軟で創造的な学習空間の整備
- **地域の未来を担う人材育成**：厚沢部町の特色を活かした教育の展開

第2章 基本構想の位置づけと期間

2-1 基本方針との関係

本基本構想は、基本方針で示された教育理念・教育目標・教育内容・施設方針を踏まえ、より具体的な教育課程と学習環境の在り方を示すものです。基本方針が「何を目指すか」を示すものであるのに対し、基本構想は「どのように実現するか」を明らかにします。

2-2 基本計画・実施計画へのつながり

基本構想に基づき、今後、詳細な施設規模・機能を定める基本計画、具体的な設計・建設を進める実施計画を策定します。

計画の流れ

基本方針（理念・方向性）→ **基本構想（教育内容・学習環境）**
基本計画（施設規模・機能）
→ 実施計画（設計・建設）

¹ 次期学習指導要領：日本の公立学校で「何を」「どのように」教えるかを定めた国の教育課程の基準（ルール）です。この文書で触れられている「次期」とは、社会の急速な変化（Society 5.0やAI時代）に対応するため、文部科学省が2030年代に向けて改訂を検討している新しい教育方針を指します。

² CO-SHA Platform:文部科学省が提唱する、新しい時代の学校施設のあり方を示すコンセプトです。従来の固定的な「教室」の枠を超え、多様な学習活動や地域との連携に「**共創（Co-creation）**」を通じて「**空間（Sha-space）**」を柔軟に利用・変化させることを目指します。

第3章 厚沢部町義務教育学校が目指す教育ビジョン

3-1 教育理念

基本方針で示された5つの理念を発展させ、次期学習指導要領の方向性を踏まえた教育理念を掲げます。

5つの教育理念（義務教育学校設置に関する基本方針より）

厚沢部町の義務教育学校は、以下の5つの理念を基軸とし、9年間の学びを通じて「自ら道を切り拓く力」を育みます。

1. 学びの連続性の重視と個別最適化された教育

～個別最適な学びと、困難に立ち向かう「忍耐力」の両立

幼児教育からの円滑な接続を図り、児童生徒一人ひとりの成長を支え、「はぜる」の理念を基盤にした個別最適な教育と学びの連続性を両立します。自分の興味・関心を追究するだけでなく、時には困難な課題に対しても粘り強く取り組み、自分を律して成し遂げる「忍耐力」を養います。さらに、児童生徒が心身の健康を保ちつつ意欲的に学び続けられるよう、日常的な運動や地域活動との連携を図り、健全な成長を促します。

2. 地域とともに歩む教育

～郷土愛の醸成と、社会の一員としてのルール・礼儀の習得

地域の自然、文化、伝統を教育活動に取り入れ、児童生徒たちが地域社会への愛着と誇りを育む教育を推進します。地域住民や社会教育関係の機関等と連携して、運動や文化活動の機会を提供し、地域全体で児童生徒を見守り、育む環境を整えます。地域社会の中での役割を果たす経験を通じ、他者と協働するために必要なルールや礼儀を学びます。

3. 未来志向とグローバルな視点の融合

～ICT・英語力と、多角的な視点・折り合いをつける力

テクノロジーの進展とグローバル化に対応するため、ICTや英語教育を通じて国際的な視野を持つ人材を育成します。母国語である日本語の力を基盤に、英語も抵抗なく使いこなす能力を養います。異なる価値観を持つ他者と対話する中で、自分の主張を通すだけでなく、互いの立場を尊重し、折り合いをつける力の育成を目指します。

4. 感じて、考える力を養う

～豊かな感性と、深く考え抜く知的粘り強さ

多様な課題に対処するため、児童生徒の豊かな感性を尊重しながらも、それを論理的な思考や表現力に結びつける教育を実施します。読書や文化体験を通じて感性を磨くとともに、ICTを活用して創造的な表現の場を提供します。思考のプロセスにおいて、安易な正解に飛びつかず、深く考え抜くという知的粘り強さを大切にします。

5. 個性を活かす教育

～自由な発想の尊重と、それを支える地道な努力・責任感の育成

児童生徒一人ひとりの個性を大切にし、その自由な発想と表現を認める教育を目指します。「探究の学習」を重視し、児童生徒が自らの「好き」や「得意」を見つけ、深めていく過程を支援します。ただし、自由には責任が伴うことを理解し、基礎・基本の知識を確実に身につけるための地道な努力や、集団生活の中での我慢と譲り合いを学びの土台として、それぞれの個性を最大限に発揮できる力を育みます。

3-2 育成を目指す資質・能力

次期学習指導要領で示される「三つの柱」に基づき、育成を目指す資質・能力を明確にします。

(1) 知識及び技能

- **基礎的・基本的な知識技能の確実な習得**：各教科の基盤となる知識・技能を確実に身につける
- **各教科等の中核的概念³の理解と活用**：教科の本質を理解し、実生活に活用する力
- **ICTリテラシーと情報活用能力**：デジタル社会を生き抜くための情報活用能力

(2) 思考力・判断力・表現力等

- **問いを立て、探究する力**：課題を発見し、多角的に探究する力
- **批判的思考力と創造的思考力**：情報を批判的に吟味し、新たなアイデアを創造する力
- **多様な他者と対話し協働する力**：異なる価値観を理解し、協働して課題解決に取り組む力

(3) 学びに向かう力・人間性等

- **粘り強く取り組む力**：困難な課題に直面しても諦めずに取り組む力
- **自己調整し学び続ける力**：自分の学びを振り返り、調整しながら学び続ける力
- **社会や地域に貢献しようとする態度**：地域社会の一員として貢献しようとする意識

3-3 目指す子ども像

義務教育9年間を通じて、厚沢部町の豊かな風土の中で、知・徳・体の調和がとれ、自律した社会人として成長していく姿を目指します。

厚沢部町義務教育学校が育てる子ども像

①自律し、自分をコントロールできる子ども

自らの目標を主体的に設定し、計画的に学習を進め、感情や行動を適切にコントロールできる力を育みます。

②地域社会の当事者として貢献し、協働できる子ども

自分の「好き」や「得意」を活かして、周囲の人や地域社会のために何ができるかを考え、実践できる力を養います。多様な価値観を持つ他者を尊重し、共通の目的に向

³ 中核的概念：それぞれの教科や分野を学ぶ上で、最も基本となり、本質をなす大切な考え方のことです。単なる知識や技術の暗記ではなく、「なぜそうなるのか」「これは何のために役立つのか」といった教科の本質的な理解を深め、学習内容を実生活や異なる分野で活用する力につなげるための土台となる概念を指します。

かって対話を通じて協働し、より良い集団や社会、そして**未来**を共に創り上げる姿勢を育みます。

③自分を信じ、存在価値を実感できる子ども

自己肯定感・自己効力感・自己有用感を高め、困難に負けず挑戦し続ける態度を身につけます。

- ・自己肯定感：ありのままの自分を受け入れ、大切に思う心。
- ・自己効力感：失敗を恐れず、「自分ならできる」「やってみよう」と挑戦し続ける心。
- ・自己有用感：自分の行動が誰かの役に立っていると実感し、自分の居場所を見出す心。

④心身ともに健やかで、粘り強く活動できる子ども

日常的な運動習慣と健康的な生活リズムを身につけ、基礎体力と運動能力を向上させます。厚沢部の豊かな自然環境を活かした野外活動や地域のスポーツ活動を通じて、困難に負けない心と体を育てます。体育の授業では、仲間と協力する楽しさや記録に挑戦する喜びを体験し、生涯にわたって運動に親しむ習慣を養います。

⑤厚沢部の自然・文化・人を愛し、誇りを持って語れる子ども

地域学習やキャリア教育を通じて、厚沢部町の豊かな自然、歴史、文化、産業、そして、地域を支える人々の営みに触れ、ふるさとへの深い理解と愛着を育みます。将来、どこで生活しても、「厚沢部で育った」ことに誇りを持ち、自分の言葉で故郷の魅力を語り、地域の未来に思いを馳せることができる人材を育成します。

第4章 2030年代の社会を見据えた教育の方向性

4-1 「主体的・対話的で深い学び」の深化

(1) 「好き」を育み「得意」を伸ばす個別探究の重視

次期学習指導要領では、児童生徒の「好き」（興味・関心）を育み、「得意」を伸ばすことが重要視されます。本校では、個別の探究活動を充実させ、一人ひとりの興味・関心に基づいた学びを展開します。

(2) 当事者意識を持った課題解決型学習

地域の課題を自分事として捉え、当事者意識を持って解決に取り組む学習を推進します。これにより、学びが実社会とつながり、深い学びが実現されます。

(3) ICTを活用した個別最適な学びの実現

一人1台端末を活用し、学習データの分析に基づいた個別最適な学習支援を行います。AIドリルや学習支援システムを効果的に活用し、個に応じた学びを実現します。

4-2 探究的な学習の質的向上（異年齢での協同的な学び）

次期学習指導要領では、個人探究とグループ探究を組み合わせた探究学習の充実が図られます。本校では、義務教育9年間を貫く「探究の時間」を軸に、学年を越えた学び合いを実現します。

(1)異年齢集団（学年混合）による学び合いの促進

学年ごとの固定的な集団だけでなく、異年齢で構成されるグループでのプロジェクト学習を取り入れます。上の学年が下の学年をリード・サポートし、下の学年が上の学年をモデルとする「教え合い・学び合い」の関係性を通じて、他者への思いやりや主体的に学ぶ姿勢を育みます。

(2)対話と自律を軸とした学習サイクル

一人ひとりの問いに基づき自律的に進める「個別学習」と、車座（サークル）形式での「対話的な学び」、そして体験活動や成果の「共有・発信」を組み合わせた学習サイクルを構築します。遊びや感性を動かす体験を学びの入り口とし、9年間を通じて確かな学力と思考力を深めます。

4-3 情報活用能力の抜本的向上

(1)全教科でのICT活用の日常化

ICTは特別な道具ではなく、**学びの基盤的ツール**として全教科で日常的に活用します。プレゼンテーション、調査研究、創作活動等でICTを効果的に活用する力を育成します。

(2)プログラミング教育の系統的实施

1年生から9年生まで発達段階に応じたプログラミング教育を実施し、論理的思考力とデジタル創造力を育成します。

(3)AI時代に求められるデジタル・シティズンシップ教育⁴

情報モラル・情報セキュリティに加え、AI時代に求められる**デジタル・シティズンシップ**（デジタル社会の構成員としての責任ある行動、倫理観など）を育成します。

4-4 グローバル教育とローカル実践の統合

(1)英語教育の充実（4技能統合型）

1年生から外国語活動を開始し、「聞く・話す・読む・書く」の4技能を統合的に育成します。オンライン国際交流も積極的に取り入れます。

(2)国際理解教育と地域学習の往還

地域を学ぶことで世界を理解し、世界を知ることによって地域を見つめ直す「グローバル」な学びを展開します。

⁴ デジタル・シティズンシップ教育：インターネットやAIなどのデジタル技術が社会生活に不可欠となった現代において、デジタル社会の一員として責任を持ち、適切に行動する能力と態度を育むための教育です。単なる「情報モラル」（危険なことに遭わない・加害者にならない）に留まらず、情報を正しく批判的に判断する力や、デジタル技術を活用して社会の課題解決に貢献する力など、デジタルを使いこなしてより良い社会を築くための市民性を育てることを目指します。

(3)広域的な「学びの交流」の推進

地域外の専門的な知識やスキルを持つ人材や学校との交流を積極的に推進します。これにより、多様な価値観や新たな知見に触れ、視野を広げるとともに、地域を相対化して捉え、より深く愛する力を養います。

4-5 健康・体力の向上と生涯スポーツの基盤づくり

基礎的な運動能力と体力の向上を図るとともに、体育の授業や部活動、地域のスポーツ活動を通じて、生涯にわたって運動に親しむ態度を育成します。また、食育や健康教育と連携し、自ら健康を管理できる力を養います。

第5章 9年間一貫教育の教育課程の構想

5-1 学年段階の区切り（2・3・4制の導入）

発達段階の特性と、異年齢集団による学びの効果を最大化するため、9年間を「2・3・4」の3期に区分します。

第1期（1・2年生）：学校生活の基盤形成と「学ぶ楽しさ」の醸成

幼児教育からの円滑な接続（アプローチ・カリキュラム）を重視し、生活科を中心とした合科的・体験的な学びを展開します。身近な自然や友だちとの「遊び」を学びの種とし、知的好奇心を広げながら、学校生活の基本となる生活習慣や基礎的な読み書き・計算の定着を図ります。

特に厚沢部町の教育財産である「はぜる(遊びから生まれる学び)」の理念を教育活動の基盤として位置づけます。こども園での「はぜる」の実践を小学校教育に円滑に接続させ、子どもたちが「やってみたい!」と目を輝かせる体験を通じて、主体性と探究心の芽を育みます。こども園との定期的な交流活動や、保育士と教員の合同研修を通じて、0歳から9年生までの連続性のある学びを実現します。

第2期（3～5年生）：集団の中での自立と「協働的な探究」の深化

具体的な体験から抽象的な思考へと移行する時期に合わせ、複数学年による「ファミリーグループ」での活動を本格的に導入します。異年齢の仲間と協力して地域の課題解決に挑むプロジェクト学習を通じて、自分の意見を伝え、他者の声を聴くコミュニケーション力を養います。教科学習においては、基礎知識を互いに教え合うプロセスを取り入れ、確かな学力と社会性を同時に育みます。

第3期（6～9年生）：専門性の追求と「社会への参画」

教科担任制による高度な学習とともに、中等教育への早期接続を図ります。特に6年生については、単なる「前期課程の修了生」ではなく、9年生を筆頭とする「学校を牽引するリーダー層（後期課程）」の一員として早期に位置づけます。

最上級生である9年生は、将来を見据えた高等学校等への進学指導を受けながら、学校運営や地域課題の解決といった実社会に繋がる責任ある役割を分担し、自覚を持って社会への参画を果たします。



5-2 教科等横断的な学びの推進

(1)各教科の中核的概念を軸とした単元構成

各教科の**中核的概念**（その教科で最も重要な概念）を明確にし、それを軸とした単元を構成します。これにより、教科の本質的な理解を深めます。

(2)総合的な学習の時間を核とした教科横断プロジェクト

総合的な学習の時間を核として、複数教科が連携したプロジェクト学習を展開します。例えば、環境問題を理科・社会・数学・国語で多角的に学習します。

(3)STEAM教育⁵の推進

Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Arts（芸術・教養）、Mathematics（数学）を統合したSTEAM教育を推進し、創造的問題解決力を育成します。

⁵ STEAM教育：Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Arts（芸術・教養）、Mathematics（数学）の頭文字をとった言葉です。これらの分野をバラバラに学ぶのではなく、教科を横断して統合的に学ぶことで、創造的な問題解決能力や、新しいものを生み出す力を育むことを目指す教育手法です。厚沢部町では、特に地元の木材加工と連携した「ものづくりラボ」などを通じて、この教育を推進する方針です。

5-3 個別最適な学びの実現

(1) 習熟度別・興味関心別の柔軟な学習集団編成

児童生徒の学習状況や興味・関心に応じて、**柔軟な学習集団**を編成します。習熟度別指導や興味・関心別の選択学習を充実させます。

(2) デジタル教材の活用と学習データの可視化

AIドリルや学習支援システムを活用し、学習データを分析して個別の学習支援を行います。学習の可視化により、効果的な指導と支援を実現します。

(3) 自己管理能力が未熟な児童生徒への支援体制

アジャイル⁶な学習空間や自律的な学びは、自己管理能力の高い児童生徒には有効ですが、「何をしていいかわからない」児童生徒への支援も重要です。教員による適切な声かけ、学習メニューの可視化、ピアサポート(仲間による支援)の仕組みを整備し、すべての児童生徒が安心して学べる環境を構築します。

5-4 厚沢部町ならではのキャリアラム

(1) 地域学習・キャリア教育（ステップアップ型の貢献）

学年段階に合わせて、地域との関わりを段階的に広げ、自己有用感を高めます。

発達段階に応じた地域学習の展開

- **第1期（地域との出会い）**：身近な地域の自然や人々との触れ合いを通じ、愛着を育みます。
- **第2期（地域の価値発見）**：厚沢部町の農林業、歴史、文化を深く知り、自分たちの町の「誇り」を見つけます。
- **第3期（地域への参画）**：町の課題を自分事として捉え、テクノロジーや専門知識を活かして、持続可能な厚沢部の未来を提案・実践する「社会参画」としてのキャリア教育を展開します。

(2) グローバル教育

- **英語教育の充実**：1年生からの外国語活動開始、4技能統合型指導
- **オンライン国際交流の実施**：ICTを活用した海外校との交流
- **異文化理解と多様性教育**：多様な価値観を理解し尊重する態度の育成

(3) ICT・STEAM教育

- **プログラミング教育の系統的実施**：1年生から9年生までの系統的指導
- **データサイエンスの基礎**：データを収集・分析・活用する力の育成

⁶ アジャイル：もともと「素早い」「機敏な」という意味を持つ英単語。本文書においては、児童生徒の活動内容や人数、授業形態（一斉授業、グループワーク、個別学習など）の変化に素早く、柔軟に対応できるように、空間や設備を自由自在に組み替えられる設計の考え方です。

- デジタルファブリケーション体験⁷：3Dプリンター等の先端技術を活用したものづくり

(4) 体育・健康教育の系統的指導

- 第1期：体を動かす楽しさを実感し、基本的な運動感覚を身につけます。
- 第2期：多様な運動を経験し、仲間と協力する喜びを学びます。
- 第3期：専門的な技能を高め、生涯スポーツの基礎を確立します。

5-5 新しい学びに対応した評価のあり方

探究的な学習、異年齢協働学習、STEAM教育など、本校が重視する新しい学びに対応した評価方法を確立します。

(1) プロセス重視の評価

結果だけでなく、探究のプロセス、試行錯誤の過程、粘り強さを評価します。ポートフォリオやリフレクションシートを活用し、児童生徒の成長の軌跡を可視化します。

(2) ルーブリック評価⁸の導入

「協調性」「創造性」「批判的思考力」など、数値化しにくい資質・能力について、明確な評価基準(ルーブリック)を策定します。これにより、児童生徒・保護者が何を目指すべきかを理解できるようにします。

(3) 自己評価・相互評価の充実

児童生徒が自ら学びを振り返る自己評価力を育成します。また、仲間同士で学びを評価し合う相互評価を通じて、メタ認知能力を高めます。

(4) 保護者への丁寧な説明

新しい評価方法について、保護者説明会や通信を通じて丁寧に説明し、理解と協力を得ます。

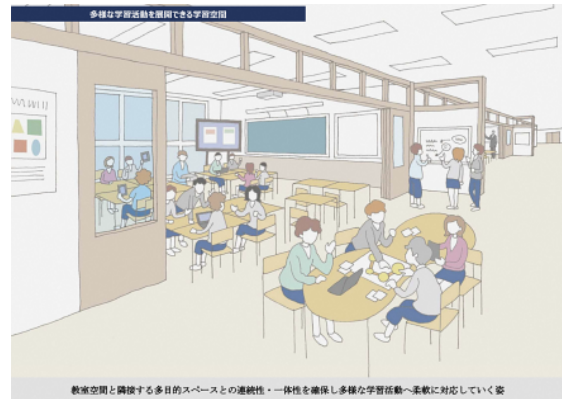
⁷ デジタルファブリケーション体験 (Digital Fabrication Experience)：デジタルデータ (PC上で作成した設計図など) を元にして、3Dプリンターやレーザーカッターなどのデジタル工作機械を使って、実際にモノを形にする (つくる) 体験のことです。厚沢部町の基本構想では、地元の木材加工と連携した「ものづくりラボ」などで、このような先端技術を活用し、児童生徒の創造性と技術力を育むことを目指しています。

⁸ ルーブリック評価：テストの点数のように数値化しにくい能力 (例：「協調性」「創造性」「粘り強さ」など) を評価するために用いる、明確な評価基準表のことです。評価の項目、段階、それぞれの段階で求められる到達度 (「何ができれば最高の評価になるか」など) が具体的に示されます。これにより、児童生徒や保護者が、「何を」「どのようなレベルで」目指すべきかを分かりやすく理解できるようになります。

第6章 学習空間と教育環境の基本コンセプト

6-1 CO-SHA Platform理念に基づく柔軟で創造的な学習空間

「2・3・4制」の導入と異年齢学習を支えるため、文部科学省のCO-SHA Platformの考え方に基づき、従来の「教室」の枠を超えた**柔軟で創造的な学習空間**を整備します。多様な学びに対応し、児童生徒が主体的に学習環境を選択できる空間を実現します。



文部科学省「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」より

(1) 多様な学びに対応する空間構成

一斉授業、少人数グループ、個別学習、プレゼンテーションなど、多様な学習形態に即座に対応できる「アジャイルな学習空間」（状況に応じて柔軟に組み換えられる学習空間）を構築します。可動式の壁や家具を活用し、児童生徒が自ら学びの場をデザインできる環境を整えます。

(2) 学年段階に応じた学習環境整備

学年ユニット（1-2年、3-5年、6-9年）ごとに、専用の「スクールコモンズ（共有スペース）」を配置します。低学年ユニットは、地元産の木材を多用し、五感を刺激する温もりのある空間とします。高学年ユニットは、より専門的な探究に対応できるよう、静かに思考を深めるエリアと、活発に議論するエリアを明確に分けます。

(3) 探究の拠点としてのメディアセンター（図書館）の充実

タブレット端末（ICT）が普及した現代だからこそ、情報のハブとしての「物理的な図書館」の重要性が高まっています。

- **情報の信頼性と体系性の担保**

断片的な情報になりやすいインターネットに対し、専門家によって編纂された図書は、知識の体系性を学び、情報の信憑性を確認する（リテラシー教育）ために不可欠です。

- **セレンディピティ（偶然の出会い）の創出**

検索によって「知りたいことだけ」を知るデジタルに対し、多様なジャンルの本が並ぶ空間は、未知の領域への興味を誘発します。

- **デジタルとアナログの融合**

ICTを活用した情報検索と、紙の資料による深い思考を組み合わせる「ハイブリッドな探究拠点」を目指します。

(4) STEAM教育・ICT教育環境

- **デジタル・アナログ融合型の「ものづくりラボ」**

厚沢部町の主要産業である林業・木材加工と連携したメイカースペースの整備を検討します。手工具による伝統的な木工技術の習得に加え、将来的に3Dプリンターやレーザーカッターなどのデジタル工作機械の活用も視野に入れることで、地元の木材を用いた精密な設計や迅速な試作（プロトタイピング）を可能とする、創造性と技術力を高めるSTEAM教育の場を目指します。

- **先端技術と自然の融合**

ICTを活用したデータ分析と、厚沢部の豊かな自然（森林、農地）でのフィールドワークを往還させ、科学的な視点で地域を捉える学びを推進します。

- **アジャイルなICTインフラ⁹**

全校的な高速Wi-Fi環境を整備し、教室だけでなくコモンズや図書室、ラボなど、校舎内のあらゆる場所が、即座に探究と創造の場となる環境を構築します。

⁹ アジャイル（素早く機敏な）という考え方に基づいた情報通信環境のことです。具体的には、全校的な高速Wi-Fi環境などを整備することで、教室や特別教室、共有スペースなど、校舎内のあらゆる場所が、その時々での学習活動や探究のテーマに応じて、即座に学びの場として活用できるように設計された、柔軟性の高い情報基盤を指します。

6-2 安全・安心で快適な教育環境

(1) バリアフリー・ユニバーサルデザイン

- **多様な児童生徒が共に学べる環境**

インクルーシブ¹⁰教育の理念に基づき、障害の有無に関わらず、すべての児童生徒が安心して学べる環境を整備します。

- **特別支援教室と通常教室の柔軟な連携**

特別支援教室と通常教室を近接配置し、個別のニーズに応じて柔軟に行き来できる環境を整備します。

(2) 環境配慮型施設

- **ZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）¹¹の検討**

省エネルギー性能の向上と再生可能エネルギーの活用により、**ZEB化**を目指します。これにより、環境教育の教材としても活用します。

- **木材利用の推進（内装木質化）**

地域産材を活用した内装木質化により、温かみのある学習環境を創出し、木育にも活用します。地域産材の活用と持続可能なコスト構造の実現に向け、地元業者との連携による最適な調達方法を検討します。

(3) 防災機能の充実

- **地域防災拠点としての機能**

災害時には地域の避難所となるよう、必要な防災設備と備蓄倉庫を整備します。

- **耐震性・耐災害性の確保**

現在の耐震基準に適合し、自然災害に対する高い安全性を確保します。

6-3 地域連携・複合化の視点

(1) 地域住民が利用できる共有スペース

多目的ホールや会議室等を地域住民も利用できるよう計画し、**学校を地域の拠点**として位置づけます。

¹⁰ 英語で「包括的な」「すべてを包み込む」といった意味を持つ言葉。本文書における「インクルーシブ教育の理念」とは、障害の有無や個人の特性にかかわらず、すべての児童生徒が共に学び、それぞれの違いを認め合いながら、安心して学校生活を送れるように環境や教育を提供していくという考え方を指します。

¹¹ ZEB：「ネット・ゼロ・エネルギー・ビル」の略称です。高度な省エネ性能と、太陽光発電などの再生可能エネルギーの活用を組み合わせることで、建物で消費する年間の一次エネルギーの収支をゼロ（または概ねゼロ）にすることを目指した建物のことです。環境に配慮した施設づくりの目標として掲げられています。

(2) 体育館・多目的ホールの地域利用

地域のスポーツ活動や文化活動に利用できるよう、適切な動線と設備を計画します。

第7章 地域とともに歩む学校づくりの構想

7-1 コミュニティ・スクールの充実

(1) 学校運営協議会の機能強化

学校運営協議会を充実させ、**地域住民が学校運営に主体的に参画**する仕組みを構築します。教育課程の編成や学校行事の企画等において、地域の意見を積極的に反映します。

(2) 地域学校協働活動の推進

地域学校協働本部を設置し、地域住民がボランティアとして教育活動を支援する体制を整備します。専門性を持った地域人材の積極的な活用を図ります。

7-2 地域資源の活用

(1) 地域人材のゲストティーチャー

地域の専門家や経験者をゲストティーチャーとして積極的に招聘し、**本物の学び**を提供します。農業・林業・商工業等の地域産業従事者による体験学習を充実させます。

(2) 地域企業・行政との連携

町内企業でのインターンシップ体験や町役場での行政体験等を通じて、キャリア教育を充実させます。

(3) 自然環境・文化財の教材化

厚沢部町の豊かな自然環境や歴史的文化財を教材として活用し、**ふるさと学習**を深化させます。

7-3 学校を核とした地域づくり

(1) 学校発の地域活性化プロジェクト

児童生徒が主体となって地域課題の解決に取り組む「地域活性化プロジェクト」を展開し、学校が地域づくりの拠点となるよう取り組みます。

(2) 卒業生とのつながり

卒業生との継続的なつながりを保つ仕組みを構築し、進路相談や職場体験の受け入れ等で協力を得ます。

(3)地域イベントと学校行事の連携

地域の祭りや行事と学校行事を連携させ、**地域全体で子どもを育てる機運**を醸成します。

7-4 開かれた学校運営

(1)学校情報の積極的発信

学校ホームページやSNS等を活用し、教育活動の様子を積極的に発信します。透明性の高い学校運営を実現します。

(2)授業公開・学校公開の充実

定期的な授業公開を実施し、保護者や地域住民が教育活動を参観できる機会を充実させます。

(3)対話型設計プロセスの導入

CO-SHA Platformが推奨する**対話型設計プロセス**を導入し、施設整備において教職員、児童生徒、保護者、地域住民の意見を反映します。

第8章 今後の検討プロセス

8-1 対話型設計プロセスの推進

(1)教職員ワークショップの開催

教職員を対象とした**ワークショップ**を開催し、新しい学習空間の活用方法や教育課程の具体化について検討します。

(2)児童生徒の意見聞き取り

現在の児童生徒からも意見を聞き取り、子どもの視点を学校づくりに反映します。模型やスケッチを用いた参加型の手法を活用します。

(3)保護者・地域住民との意見交換会

施設計画や教育内容について、保護者・地域住民との意見交換会を重点的に開催します。単なる意見集約ではなく、「教育が厚沢部町の未来のトリガーとなる」という理解を地道に深めていくことを目的とします。

特に、限られた財政の中で教育に投資する意義について、保育園留学の成功事例なども示しながら、丁寧に説明します。先進的な教育内容(デジタル、グローバル教育、ICT、STEAM教育など)が「移住者にとっては魅力的だが、地元住民にはピンと来ない」という懸念にも真摯に向き合い、対話を重ねます。

(4)先進校視察

類似の教育理念を持つ先進校を視察し、効果的な実践事例を学びます。

8-2 開校準備

(1)教育課程の具体化

基本構想で示した教育課程を具体的な**年間指導計画・単元計画**として具体化します。

(2)教職員配置計画と組織文化の醸成

9年間一貫教育に対応する教職員配置計画を策定します。教科担任制の導入や小中教員の協働体制を整備します。

特に重要なのは、小学校文化と中学校文化の融合です。先進校視察でも指摘された通り、以下の2点が義務教育学校の成否を左右します。

①マインドの統一

小中の教員が「9年間で子どもを育てる」という共通のビジョンを持つための研修と対話の場を継続的に設けます。

②仕組み化による水準維持

教員の転勤を前提としながらも、組織として高いマインドと当事者意識を維持できるように、校務分掌、研修体系、学校文化を「仕組み」として確立します。

開校前から小中教員の合同研修・協議の機会を設け、相互理解を深めます。

(3)学校運営体制の構築

校長のリーダーシップの下、効果的な学校運営体制を構築します。学年部制や教科部制等の組織運営についても検討します。

8-3 教職員の働き方改革と業務効率化

先進的な教育構想の実現には、教職員が子どもと向き合う時間を確保することが不可欠です。新しい教育課程の導入に伴い、以下の取り組みを徹底します。

(1)「スクラップ&ビルド」（従来の業務の見直しと廃止）の徹底

新しい教育活動を導入する際は、従来の行事・会議・研修・地域行事への動員を見直し、「業務削減リスト」を作成します。形骸化した活動を大胆に廃止し、教職員の時間的余裕を生み出します。

(2)ワークショップ等への参加方法の配慮

開校準備に向けたワーキンググループやワークショップの開催にあたっては、推進側(教育委員会・設計者)が企画を担い、教職員は「専門的見地からの助言者」として短時間の参加に留めます。放課後や休日を奪わない工夫をします。

(3)ICT活用による業務効率化

校務支援システム、学習eポートフォリオ、オンライン会議などICTツールを積極的に活用し、事務作業を削減します。

(4)チーム体制による負担分散

学年部制・教科部制を導入し、特定の個人に業務が集中しない組織体制を構築します。時間割編成においても、教員に「ゆとり」が生まれるよう配慮します。

むすびに

本基本構想は、厚沢部町の子どもたち一人ひとりが、自分の「好き」を見つけ、「得意」を伸ばしながら、地域と世界に目を向けて成長していく姿を描いたものです。

2030年代の社会を見据え、予測困難な時代を生き抜く力を育むため、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に実現し、探究的な学習を充実させます。

文部科学省CO-SHA Platformの理念に基づき、**柔軟で創造的な学習空間**を整備し、ICTを活用した先進的な教育環境を構築します。

そして何より、**地域とともに歩む学校**として、厚沢部町の未来を担う人材を育成してまいります。

今後、本基本構想・基本計画をもとに、教職員、保護者、地域住民の皆様との対話を重ねながら、厚沢部町の未来に明るい光をともす義務教育学校の実現に向けて、**町民の皆様のご理解とご協力**をお願いいたします。

令和8年2月 厚沢部町教育委員会

厚沢部町が創る「新しい学校」：遊びから自立へつなぐ9年間の物語

2030年代を見据え、子ども一人ひとりの「好き」と「得意」を育む、地域と一体となった新しい義務教育学校の構想

第1期（1・2年生）：遊びを学びに変える



遊びから生まれる学び「はぜる」の理念を大切に学習の基礎と楽しさを育みます

第2期（3～5年生）：仲間と協力して深める



異年齢のグループで地域の課題に挑み、対話を通して協力を育みます

第3期（6～9年生）：専門性を高め、社会へ

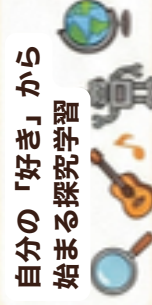


6年生からリーダーとして活躍し、将来の進路に向けた高度な学習に励みます

これからの時代を生き抜く「新しい学び」の形

ICTを「文房具」のように使いこなす

1人1台の端末を毎日使い、デジタル技術で自分の考えを自由に表現します



自分の「好き」から始める探究学習
9年間を通して、自分の興味があることをトコトン突き詰める時間を設けます

世界と地域をつなぐ「グローバル」教育



1年生からの英語学習と厚沢部の魅力を再発見する地域学習を組み合わせます

学習スペース



学習の内容に合わせて、壁や机を自由に動かせる「アジャイルな空間」

図書館（メディアセンター）



デジタルの手軽さと、本による深い思考が融合する「学びの拠点」

地域の関わり



町の人たちが先生になったり、学校が住民の交流の場になったりする場